

『農業農村開発の技術を考える』を読んで

本稿ではまず「農業農村開発の技術」を「農業開発」「農村開発」「技術」の3要素に一度分解し、「農業および農村を開発するための手段」として定義した。この手段を農村に導入・普及するにあたって、農村の人々の本音やニーズを適切に把握していくことは非常に重要だと筆者は指摘している。そのためには表面的なアンケート調査だけではなく、農村の文化を理解していくことが必要不可欠である。筆者は農業農村開発の技術の導入・普及を8ステップで紹介している。まず開発の対象地域となる農村を決定(1)し、その現場が何を必要としているのかを見極める(2)。そしてそのニーズに沿った技術を見つけるが(3)、ここでの技術は既存技術の導入(4)、新技術の開発・導入(5)のどちらも考慮に入れる。次に導入した技術を現場の地元住民に伝え、彼らがさらに他の住民たちに技術を伝えられるようガイドする(6)。こうした技術はそれまで現場で使われてきた技術にとって代わったり(7)、異なる技術同士が融合し進歩したりする(8)。現場にとって真新しい技術を導入・普及するということは、地元社会の構造、農地や文化についての知識を持ち、彼らが本当に欲しいものを提供することが大切である。

次に筆者は自身のそれまでの経験を振り返ながら農業農村開発を行う上で重要となる心構えを記している。筆者は栃木県の水田農家に生まれ、幼いころから家族が農作業に勤しんでいる様子を見てきた。当時は農作業に関わるすべての過程を村の農家が協力して行っていた。そこに技術革新や農業組合ができ、コメの生産調整が開始されたことで日本の農家の構造や生活のパターンが変化していった。農業技術の革新により、作業工程の分業化が進み、生活の中にゆとりが生まれたが、一方で村の社会環境に良くも、悪くも影響したことに留意しなければならない。最新技術を開発途上国の農村に導入することが村の住民たちにどういった影響を及ぼすのか、数十年先のその村社会や村人たちの将来についても考える必要がある。また筆者は東南アジアへの調査経験から、地元の農家は調査者(フィールドワーカー、技術者)の振る舞いや言葉遣いから性格を判断し、その相手によって回答を変えているということに気が付いたという。調査者にとって都合の良い回答をしたり、不都合な事実を述べづらくなったりするということだろう。発展途上国における農業農村開発では現場をよく知り、地域住民たちに寄り添うことが大切だが、そのためには現場の状況をよく理解し住民たちの本音をくみ取っていかなければならない。こうしたことから、発展途上国の現場だけではなく、すでに発展しきってしまった日本の農業の歴史についても造詣を持って、その現場にとって「適用可能な技術」の導入・普及をしていくべきであるということが分かる。

最後に筆者は、農業農村開発に従事する技術者の育成においてある特定の学問に精通することも重要ではあるが、異なる文化や学問に触れ、多角的・総合的視点を養うことも、農業農村社会の本音を知り、現場を的確に理解するために肝要であると指摘している。